

カッティングバルーンと超高耐圧バルーンの併用で奏功した

難治性内シャント狭窄症の一例

長崎腎病院、長崎腎クリニック

○李 嘉明, 宮崎健一, 橋口純一郎, 原田孝司, 船越 哲

【症例】

74 才女性。

【臨床経過】

糖尿病性腎症による慢性腎不全にて H16 年より血液透析導入。血圧、血糖コントロール不良で末梢血管乏しくシャント再建は4回も行った。H17年より右前腕、肘部シャントに高度狭窄部位を認め、conventional balloon を使用し十分な拡張が得られず、2~3 月おきに頻回の PTA 術が必要であった。右前腕にグラフト再建後も肘内側流出部の自己血管に強固な狭窄が持続している。超高耐圧バルーンカテーテル (CONQUEST) で最大圧 30atm を試みても拡張不良であったのが、Peripheral Cutting Balloon (PCB) 後に CONQUEST 併用で完全拡張が得られ、一次開存期間も著しく改善した。

【考察】

強固な難治性シャント狭窄の症例に対し、PCB 後に CONQUEST 併用で拡張効果および開存期間の相乗改善効果が考えられた。

【結論】

強固なシャント狭窄に対しカッティングバルーン単独では効果不十分の場合、超高耐圧バルーンとの併用で狭窄改善率が著明に上昇。併用治療後は超高耐圧バルーンで経過フォローし、年に 1 度カッティングバルーンを併用することによってシャントの長期開存が可能になることを示唆する。